

16ブロック

2006(平成18)年8月8日鑑賞(ソニー・ピクチャーズ試写室)

★★★



監督＝リチャード・ドナー／脚本＝リチャード・ウェンク／出演＝ブルース・ウィリス／モス・デフ／デヴィッド・モース／ジェナ・スターン（ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント配給／2006年アメリカ映画／101分）

……ブルース・ウィリス扮するくたびれた中年刑事の任務は、裁判所まで証人を護送すること。その距離はわずか16ブロック。すなわち大阪でいえば梅田―淀屋橋間程度。ところがこの証人を狙うのは、組織ぐるみの不正が暴露されることを恐れるNY市警のあるグループ。そんな日本でも大阪でもよくある物語が、よく練られた脚本にもとづいて展開されるが、若干ネタバレの部分も……。アイデア勝負の映画は、最後まで観客を騙さなければ……。

映画はアイデア勝負だが……？

映画づくりの最大のポイントが脚本にあることは常識。また、「脚本のアイデアがすべて」という映画が時々あるもの。そして、この映画がそれ……。脚本家のリチャード・ウェンクが思いついたアイデアとは、主人公の刑事が、証人をわずか「16ブロック」離れた裁判所に護送するという任務が他の刑事によって妨害され、その攻防戦の中で、互いの人間性ととも警察の組織的不正という驚愕の事実が明らかになっていくというもの……。

日本でも近時、大阪市の職員厚遇問題をはじめとする組織ぐるみのインチキ性や、警察内部でのさまざまな不祥事が明らかになっているが、さすがに透明性の高い(?)日本では、警察内部での組織的な犯罪という事例はなさそう……。しかし、不正・腐敗が横行する中国の公安(警察)はもちろん、自由主義国家であり、すべてを自己責任で賄うアメリカでは、警察内部でも、そんな組織ぐるみの悪事がいっぱい……。？

ブルース・ウィリスのくたびれた中年刑事ぶりは……？

ブルース・ウィリスは、『シックス・センス』（99年）や『ホステージ』（05年）等、毎年数々の話題作に出演しているトップスターだが、彼を一躍有名にしたのは『ダイ・ハード』（88年）の大ヒットによるもの。人間は誰でも年をとるもので、同じ刑事役でも『ダイ・ハード』のような若くてカッコいい刑事役が似合う時代もあれば、少し枯れた味が似合う時代もある。1955年生まれのブルース・ウィリスは今50歳を過ぎたところだから、円熟味タップリのベテラン刑事はまだ似合わない。そこで、この映画では、かつては敏腕刑事だったが、ある捜査中の事故で足を負傷した後、今はスコッチで体と心の傷を紛らせているくたびれた中年刑事という新たな役柄を開拓……。

その役づくりのために、彼は口ひげを生やし、左足を少し引きずりながら歩くという工夫を凝らしたうえ、あえて体重を増やして少し腹の出た中年太りのオッサンのイメージを……。もっとも、髪の毛の生え際の薄さはメイクではなく、地のままだが……。そう考えると、俳優という仕事は、短命なスポーツ選手と違って、息の長いいい商売……？

護送される証人は……？

この映画で、裁判所へ護送されるおしゃべりな証人エディの役を演ずるのは、『チョコレート』（01年）や『ミニミニ大作戦』（03年）に出演した個性派の黒人俳優モス・デフ。この映画の脚本はテーマを1つに絞っているため、アメリカの裁判のシステムや、エディが今どういう立場で裁判所に向かっているのか等については詳しい説明をせず、仮釈放中に悪事を犯した囚人というだけの位置づけ……。

しかし、出発以降、射殺の恐怖と闘いながら否応なくジャックと一緒に逃げ回り、何とか裁判所にたどり着かなければならないエディの口からは、さまざまな犯罪歴とともに人間味豊かな人間像が語られていく。そして、それが今は心身ともにくたびれてしまっているジャックの刑事魂（？）を呼び戻し、互いに共感していくことになるところが面白い……。寡黙な大スター、ブルース・ウィリスを

食ってしまうような、このモス・デフの演技に注目！

 8 : 02、8 : 11、そして10 : 00……

ジャックが証人のエディを裁判所に護送することになったのは、本来の担当者が交通渋滞に巻き込まれたという偶然のため。夜明けまで張込みを続けて署に戻ってきたジャックは本来なら非番で、これから家に帰りスコッチを飲もうと考えていたところ……。

そんなジャックだったが、上司から「今、手の空いているのはお前しかいないのだから……」と命令されるとやむをえない。今は午前8 : 02。16ブロック離れた裁判所に10時までに到着しなければならないが、普通なら15分もあれば済む仕事。そう考えたジャックの車は、エディを乗せ8 : 11に出発したが……。

 誰が、なぜ証人の射殺を……？

ジャックの車に乗ったエディが、何者かによって射殺されようとした……。そんな現実を目の前にして、突然呼び戻されたのがジャックの刑事魂……。ジャックは直ちにその男を狙撃して車を発進させたが、エディを狙う発砲は側に停まっていたトラックからも……。こりゃヤバイ！ 敏腕刑事時代を彷彿させる動きを見せて馴染みのバーに逃げ込んだジャックが、直ちに応援を要請したのは当然の流れ……。そこに現れたのが、ジャックのかつての相棒フランク・ニュージェント（デヴィッド・モース）とフランクの相棒ジェリーだったが……。

 「敵」はかつての相棒……

ここでフランクの口から語られる驚くべき事実は、まさに警察の組織的犯罪そのもの。すなわち、フランクたちが捜査名目で暴力的な行為に及んでいる現場をこのエディが目撃しているため、エディにそれを法廷で証言されたらヤバイ、したがって、エディを消してしまう、という理屈にならない身勝手な理屈……。ジャックがエディの護送役にならなければ、エディ射殺の計画にジャックが巻き込まれることもなかったのだが、目の前でそんな説明をされ、「さあ、エディを殺すぞ」と言われ、「ハイ、そうですか」とはさすがに言えないはず……。

力関係は圧倒的に不利だが……？

ここまでが導入部とすれば、これ以降はエディを連れて逃げながら、何とか10時までに裁判所に到着することを目指すジャックと、あくまでエディを消そうとするフランクたちNY市警の面々との闘い。その闘いは、誰が見てもジャックが圧倒的に不利。したがって、フランクの勝利でジ・エンドとなるはずと予想できるのだが、そうはさせず、巧みに逃げ回るシーンを次々とつくり出すのが、脚本家の腕……。さあ、それをじっくりと楽しもう。そして私はここで、最後のハイライトは裁判所での証言シーンと、予想したのだが……？

警察官同士の攻防戦は……？

中盤の警察官同士の攻防戦は、一応手に汗を握る程度のもの……。そして、その攻防戦の最後は、とっさにバスの中に逃げ込んだジャックとエディが追及されるシーン。タイヤを撃ち抜かれたバスは工事現場に突入して停止してしまった。そのため、やむなく乗客を人質に取ったジャックが、フランクやNY市警全体と対決するという予想もしない事態に……。そこで、フランクが描くシナリオはあくまでジャックとエディの射殺、そしてその根拠は「イカれた自殺願望の刑事のバスへの籠城で、交渉は不可能」というもの。

それぐらいのことはジャックも十分理解しているが、果たしてジャックはどんな対抗策を……？

バスジャックの攻防戦は……？

バスジャックの事件は現実にもいくつかあるが、それを処理するについて最大のポイントは、乗客に犠牲者を出さないこと。そして、そのために何の情報が必要かという点、それは犯人の人間像……。突発的に起こるバスジャック事件は、犯人の人間像が全くわからないから大変だが、今回のバスジャックの犯人ジャックの人間像は、フランクやNY市警では十分お見通し。したがって、このバスジャック事件の処理は本来簡単なはずだが、リチャード・ウェンクの脚本はここでもいろいろと手こずらせるアイデアを……。

NY市警側は人質交渉人を登場させたり、SWATを配備させたりと万全な体制を敷いたが、結論としては、ここでもジャックとエディはうまく脱出することに……。そんなバカなと思うような、その見事な手際(?)は、あなた自身がスクリーン上で……。しかし私が思うに、解放された人質を1人ずつ確保するぐらいは簡単なことなのでは……。さらに、パンクしたバスってあんなに動くもの……。?

ICレコーダーが重要な小道具に……

バスの中に1人残ったジャックは、小型のICレコーダーに向かって、「これが遺言になると思う」と前置きしながら、妹のダイアン（ジェナ・スターン）宛てに「警察の言うことは嘘だ。これが届くといいが……。俺は良いことをしたかった」と証拠になるものを残そうとするが、これは刑事として当然の努力。なぜそんな言葉から始めたのかというと、それは武力突入されたらイチコロだということがわかっているため。ところが、予想に反して、何とかバスから脱出できたことによって、このICレコーダーという小道具が、その後どう活用されるのかという点に私は着目!

過剰演技はネタバレの元……。?

そんな中、遂にある場所でジャックとフランクが2人だけで対決するシーンが……。本来ならフランクは何も言葉を交わさないままジャックを射殺してしまえばいいのだが、それでは映画は成り立たない。そこで、話し始めるのが「あの時はこうだった。この時はどうだった。だから今はどうなのだ」というお決まりの(?)回顧談や不正行為の弁解。まるで挑発するように、ジャックがうまく質問したり、文句をつけたりするものだから、次第にフランクはムキになって反論……。こりゃ何か不自然……。

カンのいい(?)私は、この時点でその後の展開を100%確信することに……。こんな過剰演技はネタバレの元だよフランクさん……。さらに脚本家のリチャード・ウェンクさん、そしてリチャード・ドナー監督も十分配慮を……。?

2006(平成18)年8月8日記